

深みに漕ぎ出せ

ルカの福音書 5章 1-11節

はじめに

今日は、イエス様が、「シモン・ペテロ」を御自身の弟子とするという出来事から学びたいと思います。

1. 神のことばを聞こうとして

イエス様は、「**ゲネサレ湖の岸辺に立って**」おられました。「ゲネサレ湖」とは、「ガリラヤ湖」の別名です。4章を見ると、イエス様はガリラヤ地方の「カペナウム」という町に来ておられました。安息日には、そこにあるユダヤ教の会堂で説教をして、人々を教えておられました。説教だけでなく、人々の様々な困り事をも助けられました。悪霊につかれた人から悪霊を追い出したり、病人たちを癒したりされました。その結果、人々はイエス様のもとに次々とやって来ました。イエス様は、一人で静まって祈る時間を持ってないほどでした。イエス様が寂しい所で静まって祈ろうとしても、人々がイエス様を捜し回って、みもとにやってくるのです。そして、イエス様が「**自分たちから離れて行かないように、引き止めておこうとした**」と4:42には書かれています。それだけ、人々が抱えている困り事は深く、イエス様に対する求めが大きかったのです。

今日の聖書箇所でも、ガリラヤ湖の岸辺に立っているイエス様に、群衆が「**押し迫って来た**」とあります。ここにも、人々のイエス様に対する求めや願いがいかに大きいかということが描かれています。

そのような群衆に対して、イエス様は少し距離を取ります。岸辺にあった舟に乗り、陸から少し漕ぎ出して、舟から説教を始めました。実は、イエス様が乗ったこの舟が、シモン・ペテロの舟だったのです。ペテロは「**漁師**」でした。その日ペテロは、夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。その疲れと落胆の中で、ペテロは「**網を洗っていた**」のです。そのような時に、イエス様に声をかけられ、「舟を陸から少し漕ぎ出してくれないか」と頼まれたのです。

イエス様は、舟に乗って、人々と少し距離を取って「**神のことば**」を語られました。なぜイエス様は、人々と距離を取ったのでしょうか。それは、人々の求めや願いがあまりにも大きかったからではないでしょうか。求めや願いがあまりにも大きくて人々との距離が近いと、説教の途中で癒しを求めたり、相談し始めたりする人々が出てくる可能性があります。しかし、舟に乗って、人々と少し距離を取ると、人々はイエス様の説教に集中せざるを得ません。「神のことば」を聞くことに集中せざるを得ません。

私たちも、この群衆と同じように、人生の中で多くの困り事を抱えています。病気や家族の問題、経済的問題、将来の不安、人間関係など様々です。私たちはそのような時に、イエス様に祈ります。現代の私たちは、イエス様に対する求めや願いは、「祈り」という形となって現れます。しかしイエス様は、しばしば私たちと少し距離を取ります。それは、「神のことば」を私たちが聞くためです。私たちは、求めや願いがあまりにも大きいと、「神のことば」が聞こえなくなります。私たちの祈りの声があまりにも大きいからかもしれません。イエス様に求め、願うこと、祈ることは大切なことです。イエス様ご自身も、それを求めておられます。しかし同時に、「神のことば」にじっくり耳を傾けることも大切なことです。もしかしたら、「神のことば」の中に、祈りの答えが語られているかもしれません。イエス様との交わりが、決して一方通行であってはなりません。人間関係においても、自分の話ばかりする人は良い人間関係を築けません。自分の話をすると同時に、人の話にも耳を傾けなければなりません。イエス様との関係も同じです。求めたり願うだけではイエス様との良い関係は築けません。私たちは、イエス様に祈ると同時に、「神のことば」である「聖書のことば」に耳を傾けなければなりません。イエス様は今、「聖書のことば」を通して、私たちに語りかけてくださっているのです。

祈ることは誰にでもできます。クリスチャンではない人でも祈ります。多くの日本人は、困り事を抱えると、神社に祈りに行きます。しかし多くの方は、「神のことば」に耳を傾けません。求めるだけ、願うだけなのです。イエス様は、私たちに語りかける神です。ですから私たちは、求めるだけ、願うだけではなく、イエス様のことばに耳を傾けなければなりません。

2. おことばですので、網を下ろしてみましよう

さて、イエス様は、群衆への説教を終えられると、ペテロに「**深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい**」と言われます。ペテロは夜通し働いて、何一つ捕れない状況でした。疲れと落胆の中で網を洗い、後片付けも終わっていました。あとは家に帰って朝御飯でも食べて、夜の漁に向けてひと眠りしたいという思いだったでしょう。しかしイエス様は、そのようなペテロに向かって、「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」と言われるのです。ペテロはプロの漁師でした。魚を捕る知識と経験が豊かでした。それでも昨夜は魚が一匹も捕れなかったのです。漁師の常識から言えば、魚を捕る最適な時間は夜でした。しかしイエス様は、昼間の今から魚を捕れと言われるのです。

ペテロからすれば、イエス様のこの命令は、無茶な命令でした。なぜ一匹も取れなかった同じ湖に、もう一度舟を出さなければならないのか、夜通し働いて、疲れて眠い状態の中で、なぜもう一度舟を出さなければならないのか、しかも漁に適していない昼間の時間帯に舟を出さなければならないのか、ペテロの知識や経験や常識から見れば、イエス様のこの命令は、無意味で無駄のように思えたでしょう。

しかしペテロは、「**でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう**」と言って、深みの漕ぎ

出して行くのです。なぜペテロはこの時、自分の知識や経験や常識から外れた、イエス様の命令に従うことができたのでしょうか。4章を見ると、ペテロは自分の姑が高熱で苦しんでいる時、イエス様に癒してもらった経験があります。ペテロはおそらくイエス様の説教をユダヤ教の会堂で聞いていたのでしょうか。その説教に感動して、自分の家に招いたところ、たまたま姑が高熱を出して寝込んでいたのです。するとイエス様が姑を癒してくださった、そういう経験がありました。ペテロは、イエス様に求め、願ったことがありました。またイエス様のことばを聞いたことがありました。しかしペテロは、イエス様の命令に従ったことはありませんでした。

ペテロはこの時、「深みに漕ぎ出して、網を下ろして魚を捕りなさい」と言われて、初めてイエス様に従うかどうかが問われたのです。求めるだけでなく、聞くだけでなく、従うことが求められたのです。ペテロが求められていたことは、自分の知識や経験や常識から外れたことでした。無意味で無駄に思えるようなことでした。ここでは、「イエス様が語られるなら」という理由だけで従うことが求められたのです。つまり、イエス様に対する信頼、イエス様に対する信仰が求められたのです。イエス様に従うには、「信仰」が必要なのです。自分の知識や経験や常識からは外れているけれども、イエス様がそう言われるならば信じます、従いますと言えるかどうか、キリスト教の信仰では大切なことなのです。キリスト教は、祈るだけでも、聖書を学ぶだけのものでもありません。そこから先の、イエス様という方を信頼して従えるかどうかなのです。

ペテロは、自分の知識や経験や常識からは外れているけれども、イエス様が言われるなら、「網を下ろしてみましよう」と言って、イエス様を信頼して従ったのです。すると何が起こったのでしょうか。おびたしい数の魚が入り、網が破れそうになりました。ペテロの舟だけでは引き上げられず、ゼバダイの子ヤコブとヨハネの舟にも助けを求めて、二艘の舟が沈みそうになるほど、多くの魚が捕れたのです。これは、イエス様に信じ従う人が経験する祝福を表しています。求めて願うだけでなく、また聞くだけでなく、信じ従う人にしか経験できない神様の祝福というのが確かにあるのだと思います。

3. 人間を捕るようになる

ではペテロは、この神様の祝福、イエス様の御業を経験して、どのような反応を見せたのでしょうか。魚がたくさん捕れたことを大喜びしたのでしょうか。自分の信仰が、このような祝福を勝ち取ったと、周りの人に誇らしげに振る舞ったのでしょうか。そうではありません。ペテロはむしろ「恐くなった」のです。そして、イエス様の足もとにひれ伏して、**「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」**と言うのです。

ペテロは、深みに漕ぎ出す前は、イエス様を「先生」と呼んでいます。しかしイエス様の御業を経験してからは、イエス様を「主」と呼んでいます。つまりペテロはこの時、イエス様こそ「主」である、唯一の真の神であると認識したのです。しかしペテロは、イエス様が唯一の真の神であることを知ると、イエス様から離れたたい、イエス様の前から逃げ出し

たいと思ったのです。なぜでしょうか。それは、旧約時代の人々は、神様を自分の目で見ると、滅ぼされてしまうと考えていたからです。罪深い人間は、聖なる神様の前に立てない、聖なる神様の前に立てば、途端に滅ぼされてしまうと考えたのです。ペテロも、イエス様が唯一の真の神であると知った時、自分も滅ぼされてしまうと思ったのでしょうか。なぜならペテロは、自分が罪深い人間であることを知っていたからです。

しかしイエス様は、そのようなペテロに対して、こう言われます。「**恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです**」。イエス様は、ペテロを滅ぼすのではなく、ペテロを用いようとされます。「人間を捕るようになる」という言葉の「捕る」という言葉は、ギリシヤ語の原文では「いのち」という言葉と「捕る」という言葉が組み合わされた言葉が使われています。つまり「生かすために捕る」「いのちを与えるために捕る」という意味です。通常、魚を捕る時は、殺して人間が食べるために捕ります。しかしペテロは、人間を殺すために捕るのではなく、人間を生かすために捕る人になるのだ、人間に命を与えるために捕る人になるのだと言われるのです。ペテロは、漁師から、人間を生かす仕事、人間に命を与える仕事をイエス様に与えられるのです。ペテロがこの時、大漁の魚を捕った出来事は、後にペテロが多くの人間を捕り、多くの人間に命を与えて生かすことになることの暗示的な出来事なのです。その証拠に、使徒の働き 2 章を見ると、ペテロが語った説教によって、一日で三千人の人がイエス様を信じて洗礼を受けるようになります。その出来事を預言しているのが、今日の聖書箇所と言えるのではないのでしょうか。

ペテロは、イエス様を信頼して従った時、人間を生かす人、人間に命を与える人とされました。私たちはどうしたら、自分を生かし、人を生かす人になることができるのでしょうか。どうしたら、自分も永遠のいのちに生き、人も永遠のいのちに生かすことができるのでしょうか。その一つは、イエス様に求め願うだけでなく、またイエス様のことばを聞くだけでなく、イエス様を信じ従うということです。求めたり願うこと、また聞くことは、自分を中心にしてでもできることです。しかし、イエス様を信じ従うことは、イエス様を中心にしなければできないことです。自分中心の生き方から、イエス様中心の生き方になること、自分の欲望に従う生き方から、イエス様のことばに従う生き方になること、それが自分を生かし、人を生かす道です。

第二に、自分を生かし、人を生かすには、自分の罪深さを自覚しなければなりません。大きく深い湖の中のどこに魚がいるかを知っているイエス様は、私たちの心の中をよくご存知です。私たちの過去もよくご存知です。私たちは唯一の真の神であるイエス様の前に、何一つ隠すことはできません。そのイエス様の前に、自分の罪を深く自覚した人こそ、自分を生かし、人を生かすことができるのです。

第三に、自分を生かし、人を生かすには、すべてを捨ててイエス様に従うことです。ペテロとヨハネとヤコブは、この時、すべてを捨ててイエス様に付いて行きました。自分の家も、妻も、兄弟も、両親も、子どもも、すべて置いて、イエス様と共に宣教の旅に出かけたのです（ルカ 18：28-30）。私たちは文字通り、自分の仕事や財産や家族を捨てる

必要はありません。しかしいざという時に、それらを捨てられる人でなければなりません。イエス様はある時、こう言われました。「**わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません**」(マタイ 10:37)。私たちは、何を第一とするかが大切なのです。私たちは、イエス様を第一としなければなりません。仕事や財産や家族よりも、イエス様を愛さなければなりません。イエス様か仕事か、イエス様か財産か、イエス様か家族かという選択を迫られた時、イエス様を選び取ることができる人、そういう人が自分を生かし、人を生かすことができるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生にはしばしば、ペテロたちのように、夜通し働いたが、何一つ捕れないということが起こります。精一杯努力したけれども、何の成果も得られない、努力が報われない、ただ疲れと落胆だけがあるということが起こります。その時に私たちは、「おことばです」と、あなたのことばに信頼することができますように。自分の知識や経験や常識ではなく、あなたのことばに対する信仰を働かせることができますように。ただ求めたり願うだけでなく、ただ聞くだけでなく、あなたに信じ従うことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。